

第3回 斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

議事要旨

あいさつ

出雲河川事務所 本検討協議会を昨年の4月に発足させ、前回10月に宍道湖・中海の圏域の取り組みとして再スタートを切り、本日は第3回目。昨今の少子高齢化という社会情勢の中、圏域がいかに力強く取り組んでいくかという取り組みの一環であると思っているので、そのような視点で、各委員の皆様方、関係者の皆様方からのご意見を伺って進めて参りたい。

事務局 前回第2回の協議会において、この「斐伊川水系生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」と、中海・宍道湖圏域市長会との密接な連携が必要という意見を頂いた。それを踏まえて先般2月10日に開催された「中海・宍道湖・大山圏域市長会」、「中海・宍道湖・大山ブロック経済協議会」の事前に、本協議会での取り組みの内容について報告している事を、議事に入る前に紹介する。

会長 社会のスピードは否応なしに激甚化をしてきている一方、変わらないのは地域の自然風土そのものであるが、それを支える一次産業に対してTPPを含めて大きな波を被ろうとしている。さらに2025年より戦後のベビーブーム世代が後期高齢者に入り、生産年齢人口の縮小によって日本のGDPが大幅に縮退する。2050年には人口半減の県が16も誕生すると言われており、地方に大きなしわ寄せが来る。まして、政府は成長を維持するためにスーパーメガリージョンなる構想を推進している。地方はどう内発的に地域を支える構造を残していくかが喫緊の課題。

本日は「生息環境づくり部会」と「地域づくり部会」で議論している成果を報告頂くことになる。先に触れた将来のこの圏域に対する予見も織り交ぜて、このような議論を、本日集約することが非常に重要。本日お集まりの多様な立場の皆様方が、どのように協働して地域に襲い掛かる諸課題に対応していくのか、どのように分担し、そのような状況を少しでも食い止め、なおかつ光輝いていくのかと言う議論について、本日検討して参りたい。

議事

(1) 生息環境づくりおよび地域づくりの検討・取組状況について

(「資料1：生息環境づくりおよび地域づくりの検討・取組状況について」の説明)

委員 この事業は非常に良い取り組み。経済界としてバックアップしていきたい。私共が面白いと思ったのは、環境を地域の資源として捉えている点。環境を保全しながら観光を振興することはイメージができるが、農業は難しい面があると思う。せっかく農業協同組合という長年にわたり農家の信頼を得ながら進めてきた組織があるのだから、農協のノウハウ・知見を活用し、販路の検討では商社や銀行といった経済界の役割と合わせて一つのブランドを形成できたらいいと思う。本会議は、農協抜きでは考えられない。強みを活かしながら勇猛果敢に挑戦していくという

ことをぜひやりたい。

委員 今日では、農業は規模が大きければ大きいほうが良いという発想で捉えられつつあるが、農業の多目的機能という観点から疑義を感じている。

今回の取り組みは非常に重要な事ではないかと思っている。具体的に農協は何が出来るかという事については、もう少し具体的になってきた段階で、色々と方向付けが貼り付いてくと思うが、農協という組織が大いに参画・協力することにより、農協組織の活性化にも繋がっていくと、期待が持てる構想と思っている。

出来ることがあれば参画、仲間入りをさせていただければと率直な感想を持っている。

会長 豊岡市の「コウノトリ育むお米」は、JAたじまに協力頂いたことにより、「ふゆみずたんぼ」などが増えていった。これを纏めた報告書もある。地域の「一次産業」と「環境」をどうやってリンクさせていくのが重要な戦略となる。

委員 この地域において、水鳥が飛来する冬は観光のオフシーズンにあたるため、冬のひとつの目玉として大型水鳥類を取り込めるのではと期待している。

それぞれの団体また市・県と協力し、地域の未来像、プラスのイメージを共有して、出来るところから取り組んでいければと思う。一つのブランド化、観光客へのアピール、地域全体が大変優れた景観の場所だということ全国や世界に発信すると、春から秋にかけても効果があると思う。TPPなどのいろいろなハンディがある中で、この事業は良い切り口であると思う。

委員 生き物の豊かさをどう捉えるかという視点が重要。マガンは60年代までは全国各地にいたが、環境の変化にとっても敏感で、太平洋側ではほとんど棲めなくなった。日本海側に点々と残っている中で、宍道湖・中海は国内で最も西側の越冬地にあたる。積極的に残してきたかどうかは別として、この地域には、環境の変化に敏感なガンが棲める良好な環境が、結果的に残された。

農業に被害を与えるという側面だけを見れば、水鳥はいない方が良いわけだが、環境の変化に敏感なガンに選ばれた田んぼで出来た米、という物語を乗せて発信をしていくと、普通の米よりも価値の高いものができる。小さな被害はあるものの、それを上回る大きな恩恵が得られる方法を合意・共有できればと考える。宍道湖にはキンクロハジロというカモがとても多い。全国で飛来するキンクロハジロのうち、約2割は宍道湖にいる。これはキンクロハジロの食物であるシジミが豊富だということである。シジミを食べる害鳥となるのかもしれないが、シジミを販売する際にそのような物語を乗せることで、発信力がつき、より大きな利益を上乗せでき、トータルでは、カモがいた方がずっと地域の役に立つ、という利用の仕方をするといいいのではと思う。

宍道湖がラムサール条約湿地に登録されたのは、キンクロハジロが多く生息し、ラムサールの基準を満たしたことが一つの理由なので、ラムサールの「賢明な利用」「持続可能な資源の利用」として、水鳥たちを活かしていくと良い。

農林水産省で、日本型の環境直接支払いという制度があり、環境に配慮した取り組みに対して経済的な支援をしている。直接支払いを地元が活かしきれないために国の予算が使いきれず、来

年度は予算が削減され、将来的には更に目減りされていくのではと農水省は心配している。地元で体制を整えれば、予算があり農家も経済的にプラスになるので、もっと積極的に活かしていく方策を検討する必要があると思う。

委員 ガンカモ類の生息地域をつくることは、保護区域を設定することになると思うが、ガンやハクチョウだけでなく、カワウなどの有害な鳥類も一緒に入ってくる。有害鳥獣が地域に被害を与えた場合に、すぐに対応できる処置を考えておかなければいけない。特にカワウについては、漁業被害も相当ある。さらに、地域の景観が良いところをねぐらとして利用し、景観の良いマツなどが糞で枯れていくことがある。農業被害や漁業被害のことも併せて検討して対応しなければいけない。

委員 3～4年前から資源が減り、いろいろ問題がある。一方で、消費者から「安心・安全」という問い合わせが増えてきている。幸い宍道湖はラムサール条約登録から10年を迎え、宍道湖にはキンクロハジロは多いときは2～3万羽と大量に飛来している。漁師の水揚げが3～4千トンしかないのに、キンクロハジロは4～5千トンを食べているのではと試算されているが、水鳥は消費者の方々に「安心・安全」をアピールする上で有意義だと思う。私共も、魚介類をただ獲れば良いという訳ではないと思っている。全国の2割のキンクロハジロがいる冬場こそ、観光客を船に乗せて、宍道湖の豊かな自然も見て頂くというのも大事なことはないかと、思っているところ。出来るだけ、この取り組みに協力していきたいと思う。

会長 最近では水産物の場合にはMSC認証、養殖に関してASC認証があることが、消費行動に影響していることが明らかになってきている。安心・安全と、どのような環境で水産物や農産物が生産されたのかということについては密接な関係がある。今後の地域づくりの中で、大きな課題として考えていきたい。

(2) 今後の進め方について

(「資料2：今後の進め方について」の説明)

委員 冬の観光は山陰では激減しているので、観光の目玉として期待できるのではと考えている。平成28年の冬季にツアーの商品化という話もあるが、そのためには6月までに造成しなければならない。地域には観光地や食文化などがあるので、それらと組み合わせたらいかかと思う。

営業活動のために、各団体でプロモーションの実施も必要になる。そのためには、この地域の水鳥の写真展の開催も一案。受け入れ態勢として、それぞれの施設整備、大型水鳥類を解説する看板などの設置や、パンフレットの作成、水鳥をモチーフにしたお土産品の開発なども必要。また将来のことも見据えて、小中学生を対象とした見学会の実施も必要。また、水鳥の習性や地域の実情に詳しいガイドの養成も必要。

インバウンドについて、いわゆる観光バスを連ねた大型の観光ではなく、長期滞在型、探索型が向いているのではと思う。欧米はバードウォッチングに関心が強いので、そちらを対象として

企画してはいかがかと考える。

市長会、経済協議会、農業団体、観光協会と、それぞれの団体が密接な連携が取れるような仕組みを作って進めて頂きたい。

委員 出雲市のトキ分散センターに NPO 法人の拠点を設け、近似種の飼育や、学習コーナーの受付・案内業務などを出雲市から受託している。減農薬を行いながらブランド米化についても J A に協力を得ながら進めているが、まだうまくいっていない。

トキの一般公開を目指しているところだが、トキや環境に対する正しい認識を持ってもらいたい。今回、生息環境整備の拠点として選定された神戸川は、あまり河川改修の手が入っておらず、自然の姿が残っているところなので、大型水鳥類が飛来できるように環境整備しなければと前から思っていた。今後私たちの意見も吸収して進めて頂ければ非常に助かる。神戸地区には、赤梨といった農産物が豊富なので、トキを絡めて、観光や農業のブランド化を進めていければとも思っている。

委員 トキを出雲の空に飛ばすために、やはり自然環境を良くしなければと考えているが、地元で理解を得る難しさもあると思っている。地元の方々への理解を広げる方法を、今後この協議会でも検討して頂きたい。

水田の利用ということでは、出雲市で国営事業による灌漑工事が来年度以降ある。斐伊川の北岸の方（平田灘分地区）で、400ha あまりの農地整備を、出雲市が中心で実施する。新しい農地整備の中で、うまく大型水鳥や環境を活かしたものを取り組むことができないのかどうかと考えている。国の事業で米ができ、水鳥も飛来するというモデルをこの協議会の中でできないのか。また、「水張り水田」を農家の方が喜んで進めるような事業を考えて頂けると、もう少し自然と農業がうまく共生することができると思う。

委員 平田地区で農地整備の計画があるということは把握しているが、詳細は分からない。整備計画の中で、そのようなことが反映されるといいと思う。

トキについては、平成 23 年から分散飼育を実施し、3 つのペアで昨年までに 28 羽のヒナを孵して佐渡に送っている。一般公開については、我々としても早く実現できれば良いと思っているし、佐渡で自然放鳥されたトキが西へ移動して出雲にも飛来すれば良いと考えている。

委員 圃場整備の話は、現在全国でかなり動いており、大きな課題となっている。担い手農家に、農地を集積、集約し、基準を満たすと助成金が出て、農家の実質的な負担なく圃場整備が出来る。今いろいろなところでこのような圃場整備計画が進んでいる。今回計画の対象となっている斐伊川河口周辺の水田は、大型水鳥にとって重要な生息場所。環境配慮には農法と圃場構造の 2 つがあり、農法は農家や個人の努力で改善できるが、圃場構造は農家の力で出来ることではないので、整備計画が立案される段階から、きちんと環境に配慮した構造を盛り込んだ圃場にするように、検討していく必要がある。

私が把握している範囲では、宮城県の伊豆沼の北側に隣接する第二工区水田での圃場整備計画

で、生物多様性に配慮した取り組みが行われている。ここはナマズが水田内で産卵をしているので、水路と水田の連続性を確保する配慮が行われている。

さらに本格的なものとしては、蕪栗沼のすぐ南側のラムサール条約湿地範囲内の伸萌地区水田で、農家の方が「ふゆみずたんぼ生産組合」をつくり、「ふゆみずたんぼ米」を生産しているところがある。圃場整備計画の中で、130haのうち約40haは、「ふゆみずたんぼ」がしやすい圃場構造にすることになった。

従来の圃場整備のやり方では、生き物が棲めない環境になってしまうが、生物多様性の改善を当初から提案すれば、そのような設計ができることが分かった。斐伊川流域の整備計画がある水田でも、大型鳥類などにとって重要と思われる場所での圃場整備は、これらの生物の生息に配慮した構造にして欲しいと思う。農家との調整が必要ではあるが、技術的には可能であるので、この地域でもそのような方向での圃場整備を考えて頂きたい。

委員 「生息環境づくり部会」で、保全整備拠点として堤外地のうちの4箇所を挙げさせて頂いたが、こちらだけではマガンやハクチョウが生息できるわけでは無い、広い水田があるからこそ、この地域に大型水鳥がやって来る。水鳥だけではなく、水鳥を守ることによって、農業や漁業も守る事業として、鳥をキーワードとして絡めていけたらと思っている。

会長 まさに、この会議の真髓を突いて頂いたお話。環境省では、生態系を活用した防災や減災に関する考え方が3月末に刊行される予定となっている。また、インドで「第11回生物多様性条約締約国会議」が開かれた際に、『自然を守れば自然が守ってくれる』というのが、インドが掲げたスローガンであった。このような考え方は、今後非常に重要であると思う。

もう一つ理解頂きたいのが、堤外地の中で行う河川事業だけでは、広がりがなく大型水鳥類を呼べないということ。農業・漁業に従事されている方々、行政を司っている方々など、多様なステークホルダーが、一つの目標をどう達成するのかということについて、一体となって取り組んでいくということが、自治体を結ぶ広域のネットワークづくりの大きな醍醐味であり、意味でもあると思う。しっかり取り組んでいるということが、20~30年後の地域の構造や経済に大きな影響を与える、とお考え頂きたい。どのように一般の方々に理解を広げていくのか、という働きかけも必要。

もう一点お願いしたいのが、ネガティブ表示。鳥害の話も深刻な問題としてある。ネガティブ表示への対応策もワーキングなどできちんと話して頂きながら、問題点の所在も明確にしながらトータルで判断し進めることが大事であると思う。

委員 農業・漁業・商工会・経済界・行政すべてのあらゆる分野が融合して向かっていかなければ、大型水鳥がこの地域に滞在してくれることは難しい。中海・宍道湖の市長会、経済界も一緒に考えながら、進めて頂かなければと思っている。

境港は陸海空の交通の要所であり、海外からの観光客、韓国、中国、香港便もこれから来ようかという中で、オフシーズンを迎えるためにはどうしたら良いかということが課題。もうひとつは、我々自身がこの圏域の水鳥をよく把握できていないので、海外のお客様を迎える前に、地元

の私たちが足を運んでみる、という機会も欲しい。

会長 全国で今、同じ圏域の中で同じ問題を抱えているところは、環境を通じて協働しようという動きが非常に盛んになっている。行政には国交省の立場を超えた議論についても、総合的に取り組んで頂ければとお願いしたい。

委員 「観光」については、この進め方で良い。既に宍道湖グリーンパークや米子水鳥公園があるので、この資源に磨きをかけて進化させていけば良いと思う。

「農業」については、平成 28 年度の取り組みとしては販路拡大に向けた施策と、収穫量の安定が謳われているが、具体性がない。実際は農事法人さんや農家さんが幾分か取り組んでいるが、それでは圏域全体としては進化しない。

せっかく農業協同組合も参加されている訳ですから、どこで何をブランド化するのか、何を作るのか、どういう戦略を立てるのか、行政に何を求めるのかを具体的に議論をして、まずひとつの地域で成功体験を作り、広めて行かないといけない。プロジェクトチームを発足させて、具体的に同時に議論していかないといけないと思う。一定のエリアの中で、最初はそう大きいものを作らなくても良いので、試しにやってみるということをお勧めしたい。銀行も商社もすべての分野をある程度網羅した形で、複数間で議論できる体制を整えながら、実行し取り組んで頂きたい。

出雲河川事務所 この圏域の取り組みを河川の立場からのみで動かすのは限界がある。「農業」に関して、国なら農水省、団体なら農協などと、さらに具体的な農家さんにも直接入って頂く必要があるので、この場の会の総意として、ぜひプロジェクトチームを進めていこうということなら、そのような方々を中心に話を進めて参りたい。

会長 具体的な取り組みを、プロジェクトチームをつくりながら来年度の中で早急に議論していくというご提案について、この場で決議をして頂ければ、そのような方向で進められると思う。(拍手) では、そのような方向で進めさせて頂きたい。

これからの日本の中で、残念ながら工業化社会の中へ突き進んでいく地域と、地域資源を重要視しながら農林水産空間を自然資本財としてしっかり捉えている地域が混在していくことが将来の方向であろうと思う。しかし片方は、我々がそれに光を当てて、どのような社会的なシステムを作るかという設計図がなければ、なかなか浮上しない内容なので、そうした方向について、最後に議論いただき成果を得られたことについて、改めて感謝を申し上げたい。

閉会

事務局 次回の協議会は、本日のご意見と具体的な実施も踏まえて、改めてご連絡させて頂きたいと思う。

以 上